書　評

BOOK REVIEW

片山　悠樹 編著

『就「社」社会で就「職」する若者たち』

――専門学校生の初期キャリア

植上　一希

●学文社
2025年3月刊
A5判・256頁
定価3080円（本体2800円）

●かたやま・ゆうき　愛知教育大学教育学部准教授。

専門学校研究の少なさのなかで

全国には，どれくらいの数の専門学校があって，何人くらいが学んでいるか，ご存じだろうか。

答えは約2700校に約56万人。高校卒業者の約7人に1人が入学し，社会人学生や外国人留学生とともに，それぞれの職業教育のなかで学んでいる。また，一口に専門学校といっても，展開されている職業教育は多様だ。看護師，美容師や自動車整備士，調理師といった暮らしに身近な職種をはじめ，デザイナーやダンサーなど華やかな職種から，IT関連職など比較的新しい分野までさまざまだ。専門学校を卒業した人は，専門学校制度化（1975年）以降の50年で約1200万人となっている。

いかがだろうか。イメージしていたよりも，専門学校の関係者は身近で，たくさんいると感じないだろうか。ただし，これらのデータはいずれも公表されているので，関心さえあれば知ることができるものである。

では，次のような問いはどうだろう？

「どのような人たちが，どのような思いで専門学校に進学しているのか？」

「専門学校ではどのような教育がなされ，専門学校生たちはどのような学び・成長を遂げているのか？」

「専門学校生たちは，どのような生活を送っているのか？」

「専門学校生は卒業後，どのようなキャリアを形成しているのか？」

これらの問いに対して，根拠をもって答えることは難しい。なぜなら，これらの問いにもとづく本格的な調査・研究が，いまだに，ほとんどなされていないからだ。高等教育段階における中核的な職業教育機関として位置づき，数多くの職業人を輩出してきた専門学校。その社会的意義に比して，学術的な検討は乏しい。そうしたなか，「専門学校生の初期キャリア」に焦点をあてた研究書として本書が刊行されたことを，専門学校研究をしてきた一員として，歓迎したい。

本書の位置づけと概要

まずは，本書の位置づけと概要を確認しておこう。

本書は冒頭に，就「社」型キャリア（＝キャリア形成において，職業よりも会社が優先される社会における職業移行やキャリア形成）と就「職」型キャリア（＝職種中心のキャリア）という2つのキーワードとともに，本書の問いを次のように提示する。「就「社」型キャリアが優勢な社会のなかで，職業中心のキャリアはどういった特徴を持つのか。そして，若者の職業移行やキャリア形成に関する従来の研究にどのような視点を提供できるのか。」この大きな問いにアプローチするにあたり，本書は，就「社」型キャリアで周辺化されがちな視点である女性と職業教育という2つの視点をとりあげ，次の問いへと収斂させていく。「職

業教育は就「職」型キャリアを歩む若者とくに女性たちにとって，どのような役割を果たしていると考えられるのだろうか。」

そして，この問いを検討するにあたって，分析対象としての専門学校の若者（とくに女性）が設定され，彼女たちの初期キャリア形成の実態把握と分析が行われていくのである。

執筆は教育社会学を専門とするグループでなされており，メンバーは編著者の片山悠樹氏，岩脇千裕氏，都島梨紗氏，上地香杜氏，尾川満宏氏である。片山氏らは，2017年度から2024年度まで，専門学校調査を実施しており，本書はそのデータを主たる根拠としている。調査対象である専門学校は都市部2校（保育系，自動車整備系），非都市部2校（保育・福祉系，理美容系）の4校3分野であり，複数回のインタビュー調査・アンケート調査が学生の専門学校入学時（2017年度）から卒業後（2024年度）にわたって継続的になされている。

なお，専門学校研究は大きく2つの研究に分類することができる。第1が専門学校の教育実践や政策・制度に資することを目的とする研究，もしくは，専門学校のあり方を検討する研究であり，いわば専門学校に内在的な形でアプローチする研究である。第2が専門学校・専門学校生を題材にして，既存のもののとらえ方や，研究の在り方に視点を提示したり批判をしたりする研究であり，いわば，専門学校に外在的な形でアプローチする研究である。本書は後者の研究として位置づくものであり，とくに従来の教育社会学研究に対する視点の提示を目的としている。

女性と職業教育への着目

本書にはさまざまな長所があるが，ここでは大きく2つに絞って見ていきたい。

第1が，女性と職業教育という視点から，社会的・学術的に周辺化されてきた専門学校の職業教育を経由する女性のキャリア形成に着目し，その諸相を検討している点である。これは，本書の独創的な点であり，就「職」型キャリア形成にアプローチするうえでも妥当性が高いと言える。

就「社」型キャリア社会の正式なメンバーとされてきたのは男性であり，女性は周辺的なメンバーとして置かれてきた。また，就「社」型キャリアが優勢な社会では，企業は職場での訓練を重視し，採用の際に求めるのは職務のスキルではなく，訓練可能性である。したがって，就業前の職業教育は軽視されてきた。また，それゆえに，就「社」型キャリアを前提とした若者のキャリア形成研究では職業教育は分析の対象にされることはほとんどなかった。このように，従来型の研究において女性と職業教育が周辺化されてきたことを述べたうえで，本書が着目するのが，近年のサービス業の拡大・脱工業化である。この脱工業化のなかで注目すべきは，第1に「社会サービス」（=「医療業，保健医療（医療業）」，「社会保険・社会福祉・介護事業」，「教育，学習支援業（教育）」）における女性就業者の拡大であり，第2にこれらの職業における知識・スキルに対する職業教育の役割への関心の高まりである。すなわち，脱工業化のなかで，職業教育を経由した女性たちのキャリア形成が，一定程度の位置を占めているという把握がなされ，その典型として専門学校女子学生たちのキャリア形成が検討されていくのである。

既存のマクロデータを用いて，専門学校卒女性たちの初期キャリアの実態を整理した1章・2章は説得力が高い。とくに，1章では，脱工業化が進むなか，専門学校卒女性の多くは「社会サービス」を中心に脱工業サービス業に就業していること，とくに社会サービスの専門技術職に就くことで専門学校卒女性は一定の雇用の質を得られることなどが論じられており，本書が設定する視点の強固な裏付けともなっている。

また，6章～10章では，執筆メンバーらによる調査データ（保育系・美容系の専門学校生・卒業生）を用いて，専門学校女子学生・卒業生らの在学中の性別役割意識の変化，進路選択・キャリア展望，キャリア形成と地域移動，卒業後の初期キャリアなどの実態が描かれている。とくに，職業教育を通した性別役割意識の変化や，キャリア段階に応じた地域移動やキャリア展望の変化などは，従来，ほとんど検討されてないものであり，専門学校研究にも示唆する点は多い。

しかしながら，専門学校の職業教育を経由する女性のキャリア形成を検討するにあたって，根拠とするデータの少なさ（4校）・偏り（3分野）は問題点として指摘しなければならない。とくに，専門学校女子学

生が多数を占める医療分野のデータが欠けていることは，議論の説得性を損なう一因となっている。本書が重視する「社会サービス」専門技術職の中心に位置し，高校から大学までの他教育機関との比較もしやすい医療分野の調査データを加えることで，本書の議論の説得性が増すことを期待したい。

継続的な調査による職業的社会化の記述

第2の長所は，本書が在学段階から卒後段階までの継続的な調査によって，専門学校生たちの職業的社会化の諸相が丁寧に描き出されている点である。

一般的に，専門学校生たちが，職業世界に接近・参入していくプロセスと内実は，進学や就職という時点で一面的に捉えられたり，職業資格や職業的知識・技能の獲得という形で狭く理解されたりしがちである。しかし，実態は異なる。専門学校生たちは在学段階の職業教育や，卒業後の職業実践における状況に応じて，さまざまな知識・技能・価値観を獲得し，キャリア展望やアイデンティティを形成し，また，獲得してきた能力やこれまでのキャリアを意味づけていく。これは，専門学校教育の実践では感覚的に理解されている事実であるが，継続的な調査にもとづく学術的な議論はあまりなされてこなかった。本書は，この学術的な空白を埋めたという点での意義を有している。

たとえば，獲得される能力について。5章では，専門学校では，特定の職務を前提に設計された教育実践・カリキュラムだからこそ，職務の文脈に応じた非認知能力が身につきやすいこと，また，非認知能力に関する認識や自信が変化していることが，在学生への2回にわたるインタビュー調査（同一対象への1年次・2年次での調査）をもとに論じられている。また，10章では，職業教育の効果に関する専門学校卒業生への複数回にわたるインタビューをもとに，彼女たちの「知識の意味づけ」が職業実践の状況に応じて変化していることが論じられている。ある時点・状況のなかでは，効果があると認識されてなかった知識や技能も，状況が変わると効果があるものとして意味づけされていることが，明らかにされたのである。また，9章では，専門学校卒業生たちの「やりがい」やキャリア展望に関する語りが，職業的社会化のなかで，具体的かつ主体的なものになっていくことも描かれている。

継続的な調査だからこそ，こうした具体的な変化を描くことができるのであり，これらの記述により，専門学校生・卒業生の職業的社会化の解像度があがっていく。他方，この点に関して，在学段階における学びや学生生活の記述が薄いこと，とくに職業教育の核となる教育課程に関する説明がほとんどなされていないことは，残課題として指摘できるだろう。ぜひ，次の機会ではこれらの点の検討もしてほしい。

うえがみ・かずき　福岡大学人文学部教授。教育学専攻。